

群馬県の墓制

— 弥生時代後期の位置づけ —

友 廣 哲 也

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

- | | |
|----------------|------------------|
| 1. はじめに | 5. 各遺跡と地域 |
| 2. 有馬遺跡礫床墓の分類 | 6. 墓制からみた群馬県域の関係 |
| 3. 高崎市井野川流域の遺跡 | 7. 遺物からの検討 |
| 4. 小八木志志貝戸遺跡 | 8. 「市」の果たす役割 |

—— 要 旨 ——

筆者は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で群馬県内の遺跡を発掘・報告書作成をしてきた。着任後2年目にして有馬遺跡を調査することができた。

私が初めて整理した報告書は「新保遺跡Ⅲ」で、その後の有馬遺跡の報告書は「有馬遺跡Ⅰ」両報告書とも奈良平安時代編であった。

私は学生時代に古墳時代に興味をもちはじめ、弥生時代から古墳時代へかけた墓制や社会背景を考えてきた。それは有馬遺跡を調査したおかげであったと今にして思える。

筆者は墓制を考える上では、集団と社会の構造を考えることが必要と考えている。それは家族やコミュニティーの意志が一番大きな選定の基準であると考えているからである。墓の形態はその集団の特徴が現れる。なぜなら墓制とは生きている人間が死者に対する儀礼である。墓は生きている人間が死者に対して作るものである。筆者は群馬県の弥生時代後期は、遺跡によって墓の形態もそれぞれ特徴が異なっていることを理解している。つまり死者を葬るのは家族、コミュニティーの行為であるからだ。弥生時代の墓制の流れは、中期前半は再葬墓・壺棺墓・土壙墓、中期後半は周溝墓・壺棺墓後期は周溝。壺棺墓で、古墳時代に入ると方形周溝墓という図式が一般的である。

ここでは有馬遺跡、新保遺跡、小八木志志貝戸遺跡等群馬県内の弥生時代後期の礫床墓、周溝墓、壺棺墓の中から出土した年齢が分かっている人骨を中心に検討をしてみたい。

群馬県内の弥生時代後期の墓の形態は地域によってさまざまな形が確認されている。例えば有馬遺跡では80基を超す礫床墓が検出され、壺棺墓も40基を超えている。高崎市新保遺跡では周溝墓の主体部が壺を利用した土器棺墓が確認され、新保田中村前遺跡では土壙墓から焼骨が出土した例もある。また高崎市内八幡遺跡では土壙墓群の中から礫床墓が確認され、新保田中村前遺跡、日高遺跡でも礫床墓が確認されている。

おなじ弥生時代後期にも遺跡が違えば、異なった埋葬形態を確認することができるのである。このようなことがなぜ起こるのかを検討しながら時代、地域の集団社会と墓制を考えてみたい。

キーワード
弥生時代後期
礫床墓
壺棺墓
土壙墓
「市」

1. はじめに

筆者は1981年4月に当時の財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(現・公益財団法人)の調査研究員として就任し、1983～1984年の2年間、有馬遺跡の発掘調査に従事することができた。調査の間、自分の興味ある時代の遺跡にあたり、筆者は素晴らしい発掘を体験することになった。有馬遺跡は榛名山東南麓にあたる渋川市に所在している。立地的に榛名山と浅間山の火山の噴火災害を幾度となく受け、火山灰や火山軽石をはさんだ調査面は複数面にわたる。このため同じ場所を何面にもわたって調査を行う。有馬遺跡は中近世面から奈良平安時代面、古墳時代面、弥生時代面と4面を確認した。弥生時代後期樽式土器は古墳時代榛火山灰に覆われた畠のサクの下面から顔を出していた。畠の下に弥生の遺構があることに期待で胸を膨らませていた。

古墳時代の畠が終了するといよいよ弥生時代の調査面である。最終面は弥生時代後期集落面、この段階で現代の地表下4～5mを測った。弥生時代の竪穴建物⁽¹⁾が多数確認された。集落の継続時期は、弥生時代後期から古墳時代前期にかかっていた。弥生時代の竪穴建物の周囲には小礫が敷き詰められたもの、礫の集中が確認できた。

経験不足の筆者は、最初はその正体がわからなかった。県内外の報告書をあたっても同じものはなかった。やがて礫面上から人骨が確認され、墓であることが分かった。ある日、礫床面を精査していると、そこに茶色い棒のようなものが見えてきた。目を凝らしてみるとそれが鉄のように思えた。形状、規模からみると鉄剣ではないかと思った。まさにその棒は鉄剣であった。他の同じ遺構の礫面上から人骨だけでなく、歯や副葬品が出土した。発掘現場を担当する3人の間で礫床墓と命名した。やがて礫床墓が多量に確認され、有馬遺跡は弥生時代後期の集落であり墓域としてとらえることができた。

礫床墓は合計で86基、鉄剣は礫床墓から1本ずつ8基、総計で8本、ほかに翡翠製勾玉、銅釧、鉄釧、管玉、銅鏃、硝子小玉等々多くの副葬品、大量の樽式土器、人形土器も出土した。有馬遺跡ではほかに壺棺墓46基、土壙墓が1基確認されている。

筆者は1984年3月「有馬遺跡弥生礫床墓」と題した小文を当事業団の『研究紀要』創刊号に報文として載せた。

報告書『有馬遺跡Ⅱ』弥生・古墳時代編は1988年から整理が始まり、1990年に刊行された。筆者はこの弥生時代の報告書作成業務には関わることができなかったが、弥生時代から古墳時代へ考古学研究の出発点として有馬遺跡が常に心の中にあった。

それから約40年が過ぎた。今では県内でも礫床墓が多数確認されている。隣県の長野県では礫床木棺墓と呼んでいる。群馬県内では礫床墓の確認量では有馬遺跡を凌ぐ遺跡はない。

ここでは群馬県内の墓の埋葬方法を中心とした問題を再検討し、できれば群馬県内の遺跡の弥生時代から古墳時代にかけての墓制を検証してみたい。有馬遺跡では礫床墓、壺棺墓から54体を超える人骨が出土した。

本小文では墓の種別だけではなく、被葬者たちの年齢結果を併せて検討し、弥生時代後期の墓の在り方を考えてみたい。

県内出土の礫床墓、壺棺墓、周溝墓例と合わせ葬送の位置づけを併せて概観したいと考えている。そこから見えてくる社会背景と併せ、できれば背後にある家族やコミュニティの構造を考えてみたいと思っている。

礫床墓の形態分類は報告書に従い、筆者の別の視点や記憶の中から多少の訂正、修正等を加えてみたい。

人骨は分析者により、人類学的には年齢は同じでも呼び名が異なっている。例えば壮年・成年等である。

『有馬遺跡Ⅱ』報告書の刊行は1990年、『新保田中村前遺跡Ⅳ』の刊行が1994年である。ここでは最近の研究による分類である米元史織の分類に従い、年齢の呼び名を統一した。⁽²⁾

2. 有馬遺跡礫床墓の分類

『有馬遺跡Ⅱ』報告書では礫床墓の分類をA～Eの5形態に分けている。さらに墓が集中するところに1～25号墓の番号を付している。

報告書中の分類を列記する。

A類；埋葬部に礫を敷き、両端部に集石がある。

B類；A類の両側部に礫床を挟むように集石を持つ。

C類；両端部のみに集石を持つ。

D類；礫床が無く埋葬部の周囲を集石で囲む。

E類；礫床部のみ。

有馬遺跡の墓群には墓番号が付され、礫床墓、壺棺墓、のすべてにsk番号が単独で振られている。番号が二つあり、やや混乱する。筆者は〇〇号墓という集団墓分類から離れ、周溝を持つ遺構は周溝墓であり、周溝が無い墓は礫床墓、壺棺墓、土壙墓のように単独墓であると単純に戻そうと考えている。ここでは人骨の年齢と墓との関連を見るためである。礫床墓は埋葬施設の構造であり、壺棺墓、土壙墓と同じ分類である。従って周溝墓の主体部に礫床墓があると理解する。周溝墓とは周溝があつての呼称であり、周溝が無ければ礫床墓という単独墓と考える。そのため周溝を持たない礫床墓が近接して複数基あっても、単独の墓の集合ととらえる。つまり周溝墓の主体部に礫床墓があるということであり、その主体部が土壙墓であるという事と何ら変わることはない。この手法は『研究紀要』創刊号の筆者の小文にも通じている。そこで筆者は有馬遺跡5号周溝墓の主体部として礫床墓を紹介した。

有馬遺跡の礫床墓・壺棺墓のうち人骨の出土した54

体のうち性別年齢不詳が9体ある。年齢が確認された45体を対象として検討してみたい。

報告書では礫床墓すべてにsk番号が付されている。この番号は現場で着手した作業の順番であり、他に意味はない。さらに〇〇号墓を付して、sk番号と周溝墓域内等の用語が図版中にある。これらの番号・用語があるため、やや煩雑になっている。表の中で一番左の番号、新番としたものを付けてみた。新番は数量を示す意味だけである。sk番号を入れたのは従来のものを新番の右に置かないと礫床墓が特定できないためである。表のsk番号は2桁、3桁が前後するため、sk番号を若番から並べ直した。

第1表は(森本・吉田の分析を表にしたものである。)礫床と壺棺墓から検出された人骨、歯からわかった被葬者の年齢である。

有馬遺跡の被葬者の年齢区分では、老年は皆無、熟年2、成年19、若年2、小児14である。20歳以上が28人に対し未成年が16人である。森本岩太郎・吉田俊爾は熟年期と成年期の比率が7:4であり、有馬遺跡の集団は平均寿命が短い結果であるとした。(森本・吉田1990)さらに壺棺墓の被葬者は4歳以下、それ以上は礫床墓という結果を示した。しかし筆者はその傾向は認めるが、さらに個々にあたってみると、SK119壺棺墓とSK135礫床墓の被葬者はどちらも4歳前後となっている。4歳といえば幼児である。さらに63号土壌は成年男性?が確認されている。つまり、4歳以下が壺棺墓で5歳以上の未成年も含めて礫床墓に葬るとの基準らしきものを森本・吉田の分析結果から読み取れ、基準通りとは言えないものがある。63号土壌では成年男性が土壌墓に埋葬されている。(なお報告書中sk63とあるがsk63は存在しない。人骨を出土した「63号土壌」が存在しているので。誤植と考える。)

これらは例外と言えるのだろうか。また礫床墓8基から1本ずつ鉄剣が出土し、茎の部分に鹿角の痕跡、さらに鹿角製の「はばき」の一部が確認されている。礫床墓、壺棺墓に硝子小玉が副葬され、他に銅釧、鉄釧、翡翠製の勾玉、管玉、他に人形土器等が出土する。

さらにsk396、sk397は人骨の出土が無いので年齢はわからないが礫床墓を造り、sk397は礫床に接してほぼ中央に壺棺を設置し、sk396は礫床のやや南側に壺棺があるが、周囲の集石が崩れてその中に確認できる。断面図を見ると礫床が薄いが礫に接している。礫床墓の中に壺棺を置いてある様に思える。このsk396は筆者の記憶と図面から礫床墓中の壺棺墓と理解している。

有馬遺跡の壺棺墓中、5基の墓から硝子小玉が出土している(第2表)。個数は各々2個~12個出土している。有馬遺跡で壺棺墓は46基が確認され、硝子小玉が出土する率は約13%である。硝子小玉の出土率は礫床墓・壺棺墓含めた墓全体の約4%である。壺棺墓出土人

骨で年齢が分かったものは5基あった(第3表)。壺棺墓では硝子小玉以外の副葬は確認されていない。Sk396・sk397は遺跡中央東部で確認され、周溝は確認されず、6基が身を寄せる様に確認された。5号周溝墓と同じように礫床墓が集中している。sk396・sk397は礫床墓と壺棺墓が合体している例である。

ここで有馬遺跡のある渋川市内の遺跡例を加えておきたい。有馬遺跡の北に接する有馬条里遺跡では礫床墓が2基確認された。人骨や副葬品は出土していない。有馬条里遺跡の北に接する中村遺跡では円形周溝墓が検出され、周溝内に7基の礫床墓が確認された。2号礫床墓と3号礫床墓から歯が出土し、分析を行った金子浩昌は2号が若い年齢、3号が成年くらいの年齢とした(金子1986)。

空沢遺跡は有馬遺跡北西約2kmに位置し、1号周溝墓主体部に礫床墓1基が確認されている。また3号壺棺墓が確認され、複棺で斜位の状態で出土した。3号壺棺墓の下には石が置かれ斜位の状態を維持している。3号墓域内から鉄剣が出土している(大塚昌彦1980)。

筆者は要旨で述べたように被葬者が墓を選ぶのではなく、埋葬する人々が墓を選ぶと考えている。有馬遺跡sk119・sk135とsk396・sk397、さらに63号土壌は埋葬時に家族かコミュニティの意志が例外を作ったと考えている。その理由は後段で検討する。

設楽博己は2008年『弥生再葬墓と社会』で縄文時代末から弥生時代中期にかけての研究を行い様々な形態での再葬方法を検討した。ここではその研究を参考にし、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての群馬県内での葬送行為の有様を検討したい。そのうえで被葬者が生前生きていたコミュニティの背景や群馬県域の社会背景を併せて考えてみたい。

3. 高崎市井野川流域の遺跡

新保遺跡は高崎市南東部、新保町に位置し、新保田中村前遺跡と隣接する。渋川市にある有馬遺跡とは約14km南である。新保遺跡は高崎市染谷川の端に所在し、約2km南流し川は井野川と合流する。筆者はかつて新保遺跡と新保田中村前遺跡、日高遺跡までの範囲を含め、新保地域として「市」の機能を考えた場所である⁽³⁾。

特に隣接する新保遺跡・新保田中村前遺跡は遺跡同士をつなぐ大溝が流れ、溝内から木器、土器が大量に出土した。木器は板材、未成品が多数あり、ここで木器を作っていたのである。さらに板材や鹿角も大量に出土している。「はばき」が付く鹿角製の鉄剣の柄も出土しているので新保遺跡、新保田中村前遺跡で作っていたと考えている。日高遺跡では角座骨を持つ鹿角が確認され、新保田中村前遺跡、新保遺跡でも同様で、鹿狩りが行われたことが分かる。彼らは生きた鹿を狩り、食料や鹿角を手

第1表 年齢が分かった墓

No.	SK番号	年齢	墓構造	分類	硝子小玉	管玉	釧	勾玉	鉄剣	土器
1	29	壮年	礫床墓	A	○					
2	31	女性? 壮年	礫床墓	D						
3	54	壮年	礫床墓	C	○	1				壺・甕・高坏・台付甕
4	70	1歳前後	土器棺墓							
5	83	壮年	礫床墓	A	○			1		
6	84	壮年	礫床墓	A	○			1	1	
7	85	壮年	礫床墓	A	○				1	土器片
8	109	8～12歳	礫床墓脇		○			1		
9	115	壮年	礫床墓	C	○				1	
10	116	青年	礫床墓	A	○					
11	119	4歳前後	土器棺墓							
12	127	3～4歳	土器棺墓							
13	128	壮年	礫床墓	A						
14	131	小児	礫床墓	B	○					壺・高坏
15	132	成人	礫床墓	A	○					
16	133	青年	礫床墓	A						
17	134	成人	礫床墓	A					1	
18	135	4歳前後	礫床墓	D	○					
19	142	壮年	礫床墓	A						
20	367	3歳前後	土器棺墓							
21	370	幼児	土器棺墓							
22	387	壮年	礫床墓	D	○		4			銅製釧
23	390	11歳前後	礫床墓	B	○					
24	391	壮年	礫床墓	B						
25	401	壮年	礫床墓	B						
26	402	壮年	礫床墓	B						
27	408	壮年	礫床墓	A	○					
28	410	壮年	礫床墓	B						
29	412	12歳前後	礫床墓	B						
30	423	壮年	礫床墓	B	○					土器片
31	424	壮年	礫床墓	C	○					
32	425	壮年	礫床墓	B	○	1				
33	426	熟年	礫床墓	C	○					高坏
34	428	小児	礫床墓	C						
35	429	壮年	礫床墓	B						
36	432	14歳前後	礫床墓	A						
37	434	壮年	礫床墓	A	○					
38	440	熟年	礫床墓	C	○				1	
39	442	8～9歳	礫床墓	B						
40	445	壮年	礫床墓	B						
41	446	壮年	礫床墓	A						
42	448	壮年	礫床墓	C						
43	452	小児	礫床墓	E	○					
44	396		礫床墓	A						礫床上に壺棺墓
45	397		礫床墓	B						//
46	63号土墳	男性? 壮年	土墳墓							

第2表 有馬遺跡礫床墓

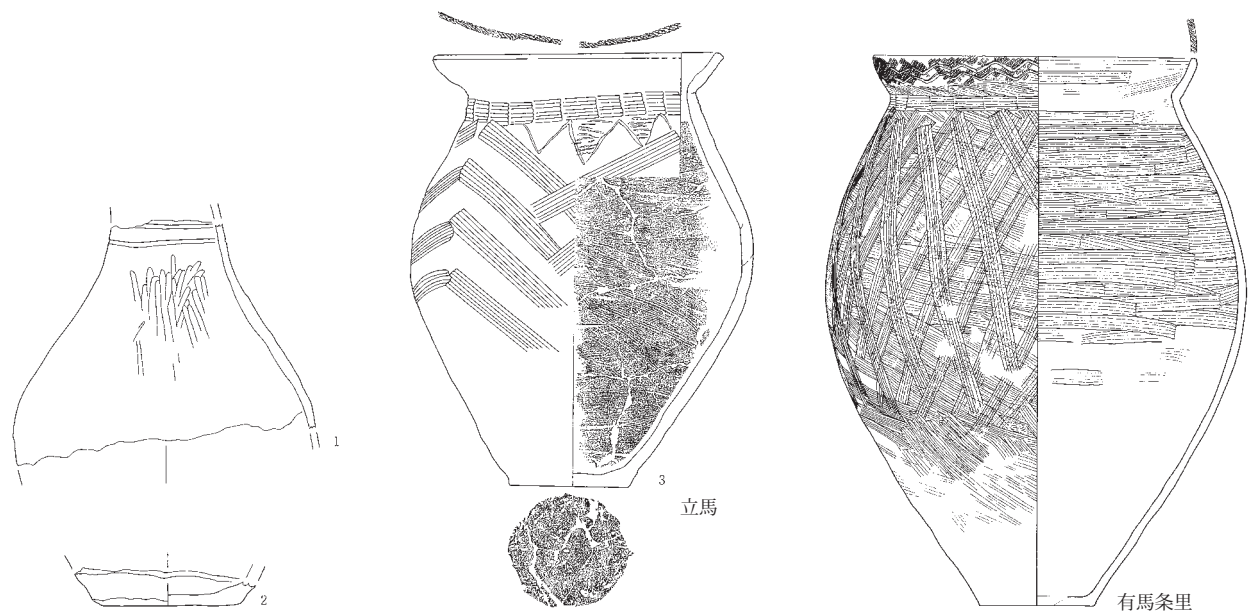
No.	SK番号	年齢	埋葬施設	副葬品
1	109	8～12歳	礫床墓	翡翠製勾玉1・硝子小玉6
2	135	4歳前後	〃	硝子小玉4
3	390	11歳前後	〃	硝子小玉5(7号墓周溝内)
4	412	12歳前後	〃	
5	428	小児	〃	硝子小玉1
6	432	14歳前後	〃	硝子小玉5(7号墓周溝内)
7	442	8～9歳	〃	

第3表 有馬遺跡壺棺墓(年齢が分かったもの)

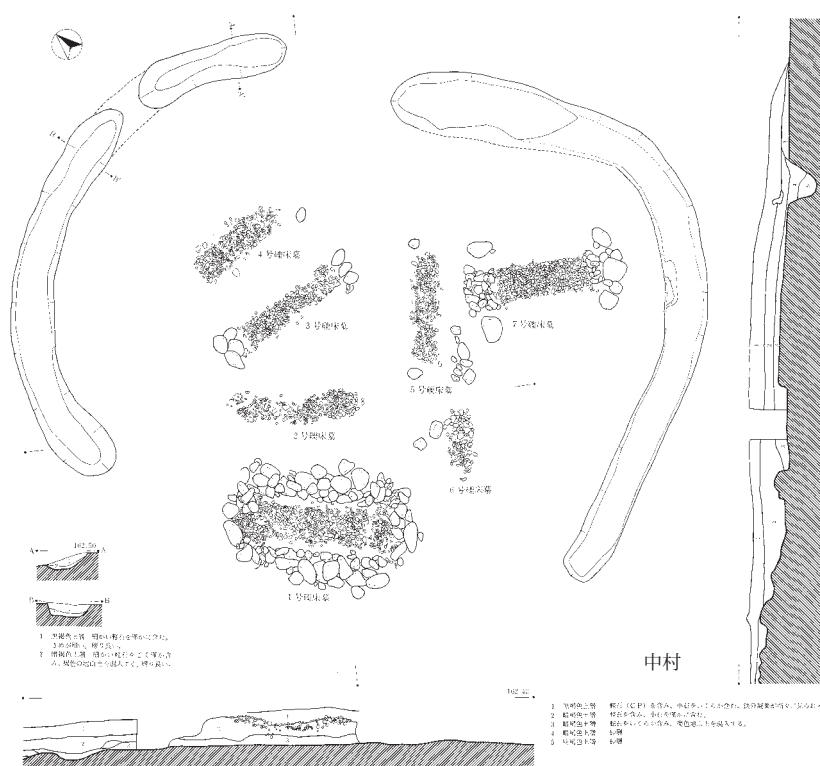
No.	SK番号	年齢	埋葬形態	状態
1	70	1歳前後	斜位	複棺
2	119	4歳前後	斜位	不明
3	127	3～4歳	立位	不明
4	367	3歳前後	立位	複棺
5	370	幼児	斜位	不明

第4表 有馬遺跡硝子玉出土壺棺墓

No.	SK番号	埋葬形態	硝子小玉	状態
1	72	壺棺墓	6	複棺・立位
2	123	〃	3	単棺・横位
3	369	〃	12	複棺・立位
4	371	〃	4	単棺・横位
5	404	〃	2	不明・横位



第1図 弥生中期甕棺墓



第5表 表新保遺跡C区

No.	遺構名	年齢	埋葬施設	備考
1	7号周溝墓	胎児	第1主体部壺棺墓	複棺
2		壮年	第2主体部土壙墓	鉄剣
3	9号周溝墓	壮年	第1主体部壺棺	複棺・土製勾玉・硝子小玉
4		壮年	第2主体部土壙墓	
5	11号周溝墓	4～5歳	第1主体部土壙墓	硝子小玉
			第2主体部壺棺墓	
			第3主体部土壙墓	
		壮年	第4主体部土壙墓	
6	15号周溝墓	青～壮年	主体部土壙墓	硝子小玉・白玉(主体部周辺)

第6表 新保遺跡D区

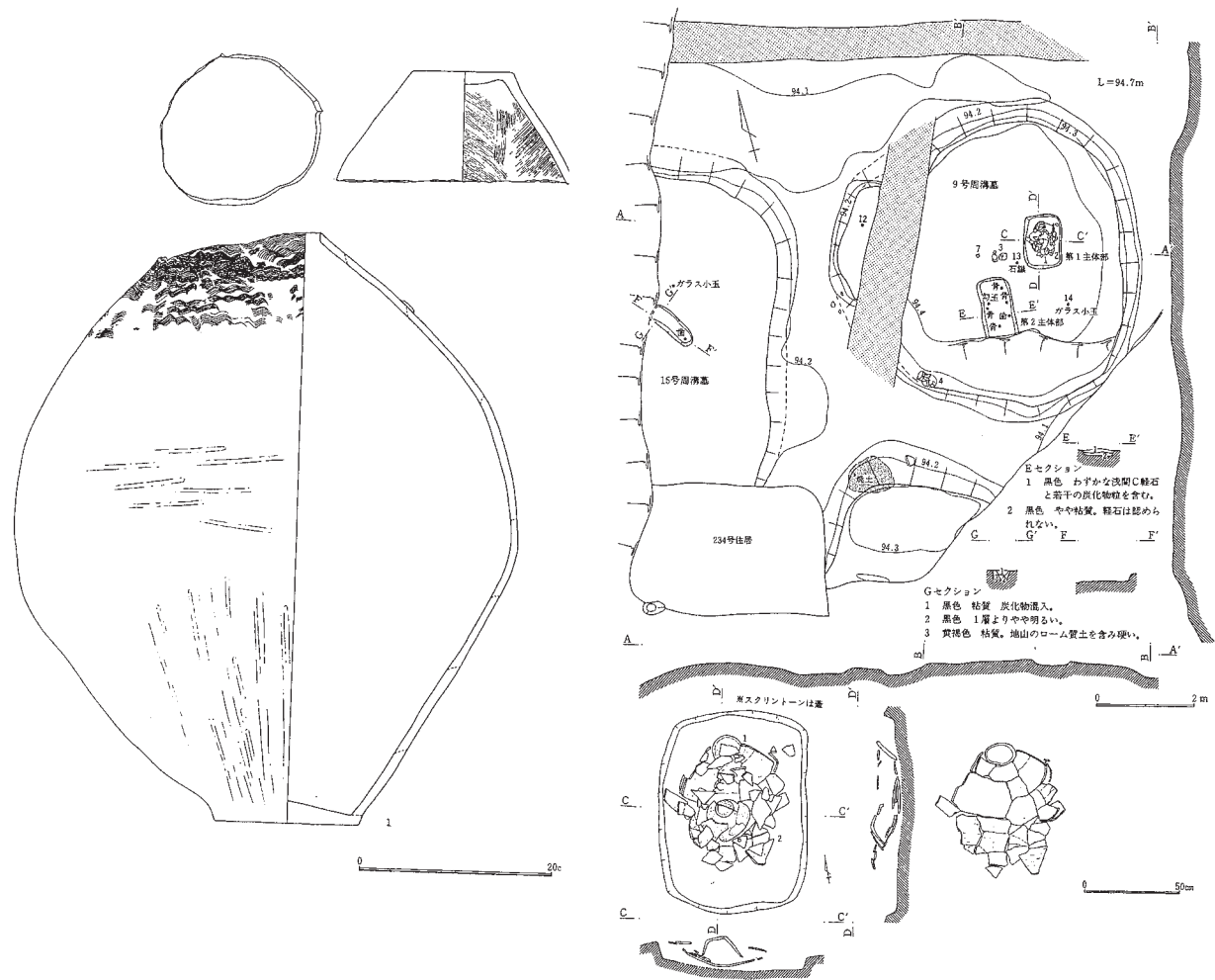
No.	遺構名	状態	埋葬施設	備考
1	D1	単複不明	第1主体部壺棺	
		〃	第2主体部壺棺	
2	D2		主体部壺棺	壺を支える石が棺の下から出土・単複不明
3	D5	単複不明	第1主体部壺棺	
		単複不明	第2主体部壺棺	
		複棺・横位	第3主体部壺棺	

第7表 新保田中村前遺跡

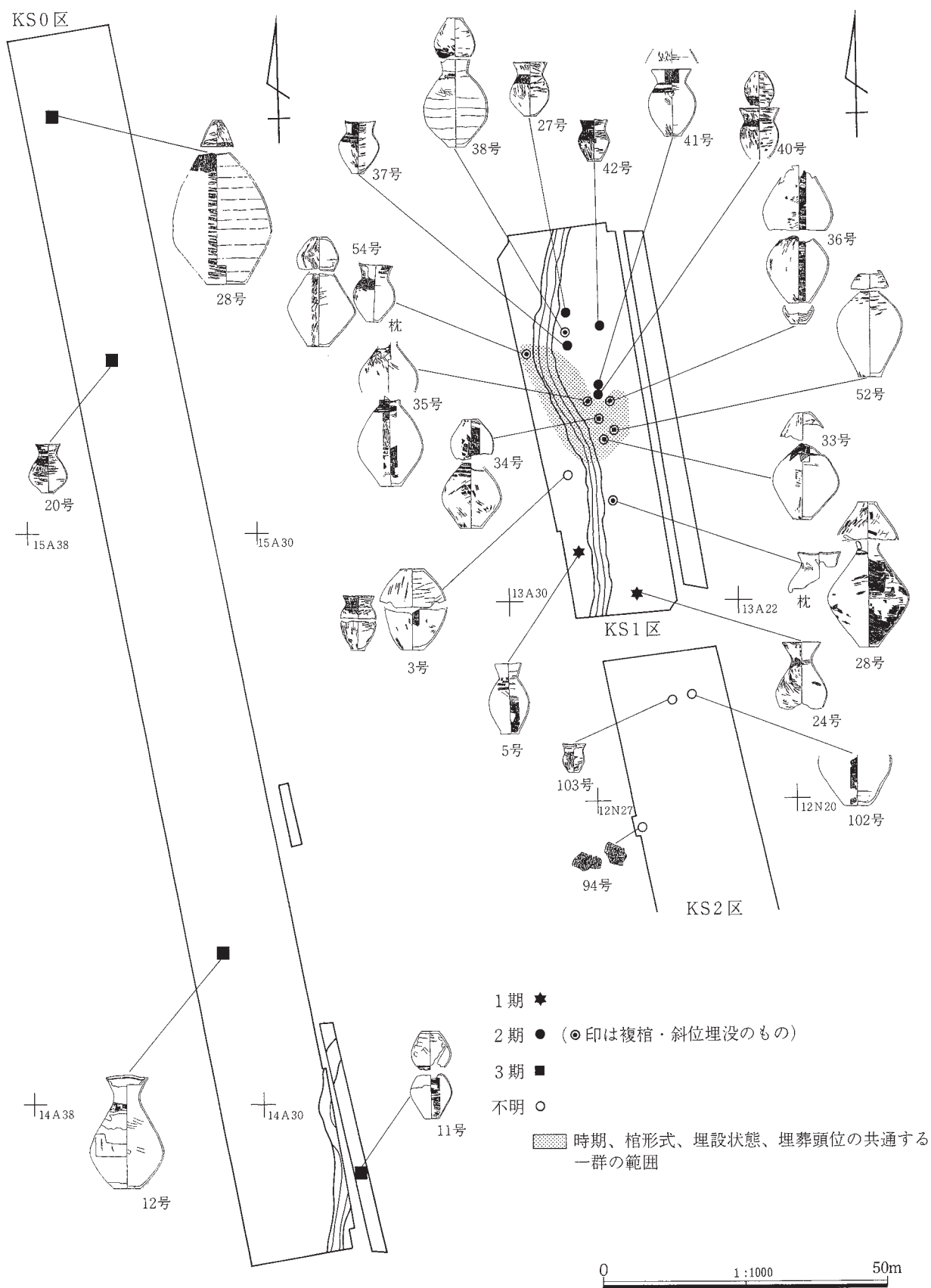
No.	墓名	年齢・性別	埋葬施設	備考	
1	6号墓	幼年	土壙墓	3体以上・硝子玉	
2		若い壮年		2体の壮年のうち1体は女性	
3		若い壮年			
4	7号墓		単独壺棺墓	単棺	
5	9号墓		土壙墓	硝子玉	
6	1号周溝墓	性別年齢不詳			
7	3号周溝墓	壮年	第1主体部土壙墓	火葬墓壙	
8			第2主体部土壙墓	〃	
9	5号周溝墓	壮年男性	第1主体部土壙墓	火葬墓壙・2体 近い血縁関係 火葬墓壙・3体	
10		年齢性別不詳			
11		壮年男性			第2主体部土壙墓
12		〃			
13		壮年女性			
		人骨無	第3主体部壺棺墓		
14	礫床墓	人骨無	木棺墓	鉄片	
15	166竪穴建物	4歳		7・9号墓と重複	
16	159竪穴建物	壮年		歯が出土	



写真1 有馬遺跡SK396右端・SK397左から3基目



第3図 新保遺跡9号周溝墓・第1壺棺主体部



第4図 小八木志志貝戸遺跡壺棺墓群分布図

していた。⁽⁴⁾

筆者は新保遺跡、新保田中村前遺跡が弥生時代中期から古墳時代前期にかけて継続した「市」の中心と考えている。「市」の主体は新保遺跡、新保田中村前遺跡である。ここで鹿角製の柄が確認され、成品、未成品の柄、鹿角素材が多数出土しているのは木器同様である。新保遺跡では周溝墓が確認されている。周溝は楕円形や円形を呈している。周溝墓の主体部には壺棺が使われるものがあり、そのうちの4つの周溝墓から人骨が確認された(第5表)。

7号周溝墓は主体部が2基あり、第1主体部壺棺墓から胎児、第2主体部は土壙墓で成人骨が確認されている。副葬品に第2主体部より「剣」と思われる鉄片が1点出土(新保遺跡報告書)の記載がある。

C区9号周溝墓の第1主体部壺棺墓から成年、第2主体部土壙墓に成年骨が出土している。第1主体部から土製勾玉、硝子小玉が出土している。

11号周溝墓の第1主体部土壙墓、被葬者は4～5歳である。第1主体部から硝子小玉が出土している。第2主体部土壙墓、被葬者は成年である。2・3号主体部からは人骨は確認されていないが、第2主体部は壺棺墓である。

15号周溝墓の主体部は土壙墓で若～成年の骨が硝子小玉、白玉と伴伴出土している。

新保遺跡の周溝墓主体部の形態は壺棺墓、土壙墓に分けることができる。7号周溝墓では胎児が壺棺墓、成年が土壙墓である。9号周溝墓は第1主体部が壺棺墓で第2主体部が土壙墓である。人骨は2体とも成年である。台1主体部の壺棺墓の頸部を打ち欠いた幅は約20cmである。成人男性を入れる幅は無く、周溝墓の主体部は再葬の伝統をもつ再葬墓の可能性がある。

9号周溝墓第1主体部は成年の壺棺墓である。子供は壺棺墓で大人が土壙墓という決まった形態があるのではなくそこは自由である。ただ共通点は円形・楕円形の周溝が巡ることがあげられる。新保遺跡では7体の人骨が確認され、5体が成年である。成年5体のうち2体は壺棺墓である。

D区では人骨は出土していないが主体部が確認され、D1が2基、D2が1基、D5が3基あり、6基とも主体部はすべて壺棺墓である。

C地区9号、11号、12号、15号周溝墓の墓域一面に猪や鹿の獣骨片が散布してあった。新保遺跡7号周溝墓第2主体部土壙墓は成人骨が出土し、鉄剣と思われる鉄片が出土している。他には9号周溝墓第1主体部壺棺墓は成人骨が出土し、土製の勾玉、硝子小玉が出土している。15号周溝墓の主体部土壙墓から若～成人の骨が出土し、硝子小玉が出土している。他に新保遺跡D区では13基の周溝墓が確認されたが、すべて人骨は検出され

なかった。D1号周溝墓第1・2主体部、D2号周溝墓の主体部、D5号周溝墓の第1～3号主体部が壺棺墓である。D2号周溝墓の主体部壺棺墓の下には棺を支える様に土器片と石が敷いてある。D5号周溝墓の周溝内には3基の壺棺墓が埋設されている。副葬品は確認されていない。

新保遺跡に隣接する新保田中村前遺跡では、4基の墓から人骨が出土し、1号周溝墓人骨は年齢不詳であった(第6表)。人骨分析を行ったのは佐倉朔である(佐倉朔1993『新保田中村前遺跡』)。6号土壙墓は166号竪穴建物と重複し、墓壙が後出する。6号墓出土の人骨は3体以上で若い成年2体と4歳という所見が出ている。さらにここからは猪の歯、硝子小玉35点出土している。

9号墓壙は6号墓壙と同じく166号竪穴建物と重複し、墓壙が新しい。硝子小玉が出土している。

他に単独の壺棺墓が7号墓壙として存在する。礫床墓が1基確認され、鉄剣との確認はできなかったが、鉄片が出土した。周溝墓出土人骨は3号周溝墓第1主体部土壙墓で成年男性の焼人骨が出土した。

5号周溝墓第1・2主体部から焼人骨が検出されている。さらに人骨は確認できなかったが礫床墓が1基確認された。猪や鹿の焼骨が墓付近だけでなく、竪穴建物内、土坑内から出土している。新保田中村前遺跡は新保遺跡同様、弥生時代中期から古墳時代前期まで継続している。

新保田中村前遺跡159号竪穴建物内で人歯が出土している。年齢は成年である。墓との確証は言えないが、人歯出土が確認されている。

日高遺跡では方形周溝墓3基、壺棺墓1基が確認された。人骨の出土は無いが、報告書では壺棺墓は胎児、幼児墓としている。

日高遺跡では木製農具が多数確認されている。新保遺跡で木器を分析した山田昌久は新保遺跡・新保田中村前遺跡・日高遺跡の木器も構成は東海地方、近畿や北陸系と近いと指摘している(山田昌久1982・1986)。

遺跡内同時期の外来系土器が示す伴伴関係も同じである。このことから新保遺跡・新保田中村前遺跡・日高遺跡は同じ農法であり、同じ農具を持って、同じ土器構成をもっている。

複数他地域系の農具は、群馬に出土する外来系土器ともおなじ、科野地域との交流の中で得たものと考えられる。新保遺跡や日高遺跡を含む井野川流域では同一の農具を用い、狩りをし、同じ土器を持つ社会を構成していたものと考えられる。3遺跡が存在した時期は弥生時代中期から古墳時代前期にかけて様々な地域の情報や文化を取り入れていたことは明らかである。

高崎市内では高崎競馬場遺跡で弥生時代中期の礫床墓が確認される。後期には八幡遺跡で方形周溝墓1基、土坑墓7基が知られ、7号土壙墓では礫が敷いてあり、墓

から鉄剣が出土している。さらに1・2・3号土坑墓覆土中には小礫が確認されているが礫床面は確認されていない。

安中市長谷津遺跡では2基の方形周溝墓が確認されている。1号方形周溝墓の周溝内より4基の主体部が検出され、1基が土壙墓、3基は礫床墓であることが確認された。壺棺墓は3基出土した。1号周溝墓の溝は方形になり、出土遺物は土師器で、古墳時代前期と考えられる。人骨は出土していない。

4. 小八木志志貝戸遺跡

壺棺墓群が確認された小八木志志貝戸遺跡を見てみよう。第8表は報告書中の表を参考にした。小八木志志貝戸遺跡は高崎市北部榛名山から東南の山麓に広がる相馬ヶ原扇状地の先端部に位置する。新保遺跡・新保田中村前遺跡の北西約3km、日高遺跡から北西2km弱である。周辺には弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺跡群が広がる井野川流域である。地形的にも相馬ヶ原扇状地内で新保地域も含めた関東平野北西部にあたる。多くの遺跡が分布する可耕地が広い地域と考えることができる。

遺跡周辺は扇状地から沖積地への変換点にあたっている。遺跡の西を天王川が南流し、遺跡の南で井野川と合流する。小八木志志貝戸遺跡は井野川流域に所在している。相馬ヶ原端部以南に広がる沖積地上には弥生時代中期から後期にかけての遺跡が多数認められる。特に後期になると遺跡は爆発的に拡大している。井野川流域は新保遺跡、新保田中村前遺跡、日高遺跡等々も含めた遺跡群が広い範囲に存在し、弥生時代中期後葉から古墳時代前期に継続している。

小八木志志貝戸遺跡で弥生時代の遺構は竪穴建物13棟、土器棺墓群が24基確認されたが、人骨は出土していない。小八木志志貝戸遺跡の墓域の特徴は居住域と墓域が完全に隔離されていることである。このような分離は新保遺跡のD区周溝墓群の有り様と似ている。新保遺跡9号周溝墓と同じ土製の勾玉が確認されている。鹿や猪の焼かれた骨片が土器棺墓の集中する周辺に確認されている。壺棺墓群が形成された時期は弥生時代後期に集中している。その中で単独の土器を使用する壺棺墓を単棺、複数土器を併せたものを複棺とし、各々単棺7基、複棺12基、不明5基である。遺跡内の土器集中部や墓周辺には猪や鹿の骨が砕かれて採取された。

5. 各遺跡と地域の関係

群馬県内では周溝墓が、弥生時代中期後葉に出現し、古墳時代前期になると方形周溝墓は、当時では一般的な墓と理解できる。

県内の礫床墓は有馬遺跡を中心とした、渋川周辺で多く

確認されている。有馬遺跡では墓域内5号周溝墓主体部の礫床墓の中で壺棺墓が確認されている。また群在する礫床墓の中に壺棺墓が検出される。礫床墓が確認される空沢遺跡、中村遺跡、有馬条里遺跡のうち、中村遺跡では「2号土坑」の項目であるが、樽式土器が埋まった状態で出土している。筆者は壺棺墓と考えてもいいと思う。

これは高さ39cmの壺、また3号土坑からは高さ残存で60cmの、頸部上を欠いた壺が出土し、これも壺棺墓である。頸部下が60cmであれば成年も入れるかもしれない。この大きさと乳幼児の棺には使わないであろう。中村遺跡の礫床墓は円形周溝墓の主体部として確認され、周溝内に7基の礫床墓が出土した。7基の礫床墓のうち2号礫床墓と3号礫床墓から歯が出土している。金子浩昌は歯の分析から2号礫床墓は若い年齢、3号礫床墓は成年としている(前掲金子1986)。空沢遺跡3号壺棺墓は複棺で斜位の状態で甕の下には石を敷いている。小八木志志貝戸遺跡のKS1-28・54号、同じ井野川流域の新保遺跡D2号周溝墓主体部の、壺棺下に敷かれた石は小八木志志貝戸遺跡壺棺墓の下に敷かれた土器片も意図は同じと考えられる。同じ井野川流域と渋川市空沢遺跡の壺の下に石や土器片で壺棺を安定させている。

このように渋川地区では礫床墓・壺棺墓が多数認められ、弥生時代中期後葉の壺棺墓が有馬条里遺跡、後期の壺棺墓が空沢遺跡と有馬遺跡で確認され、空沢遺跡の壺棺墓は高崎市小八木志志貝戸遺跡の棺の下に土器片を敷いており、石を敷く形態との共通性を示している。

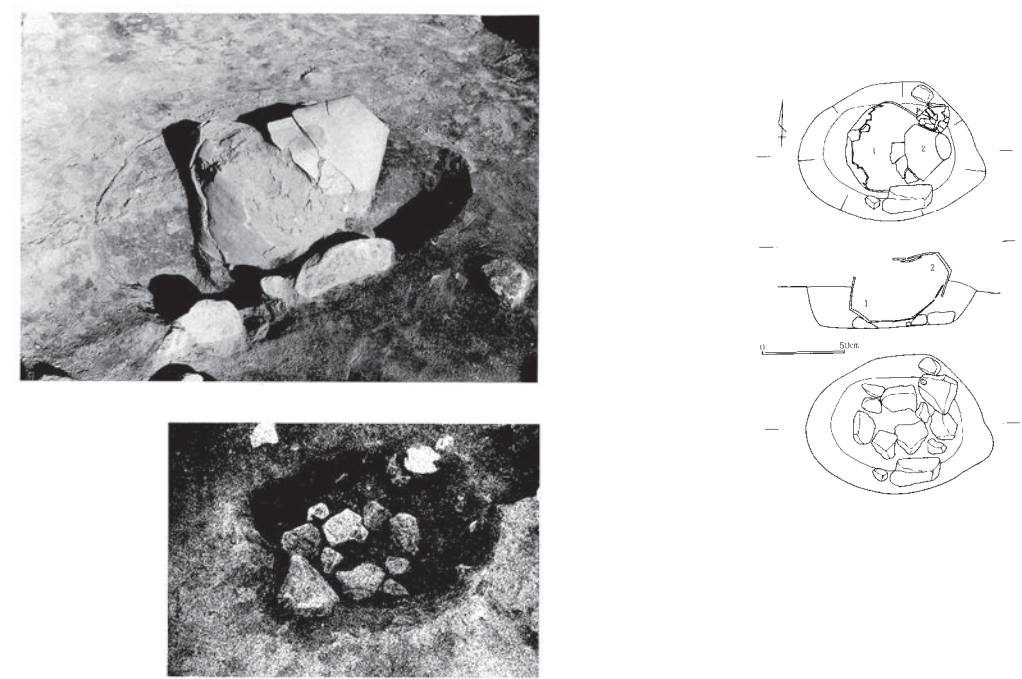
高崎市では弥生時代中期後葉の礫床墓が高崎競馬場遺跡、後期の礫床墓は新保田中村前遺跡、日高遺跡、空沢遺跡、八幡遺跡で1基ずつ、八幡遺跡7号礫床墓、空沢遺跡3号墓からは鉄剣が出土し、八幡遺跡1・2・3号土坑覆土から小礫が出土している。少林山台遺跡では9基の礫床墓が確認され、長谷津遺跡1号方形周溝墓の周溝内に礫床墓が3基、1基の土壙墓が確認されている。新保遺跡・新保田中村前遺跡の壺棺墓は周溝墓では主体部に採用されるが、主体部に土壙墓を採用する周溝墓もあり、土壙墓と壺棺墓が周溝内に共存する周溝墓も確認されている。

小八木志志貝戸遺跡の墓域はすべて壺棺墓だけで24基が検出されている。日高遺跡では礫床墓と周溝墓、壺棺墓が確認されている。このような墓制の在り方から大きな枠ではこの3種類の埋葬方法が確認してきた。

ここで墓の形状、主体部の種類が確認された。弥生時代中期後葉の有馬条里遺跡で甕棺墓が確認された。甕棺墓は吾妻郡長野原町立馬1遺跡でも確認され、甕の時期も中期栗林式土器であり、2つの甕棺は再葬墓の可能性もある。両遺跡の甕棺墓から人骨は出土していない。新田中村前遺跡周溝墓内土壙墓で焼骨が出土したことがわかっており、群馬県域内の弥生時代後期の成人を壺棺墓

第8表 小八木志志貝戸遺跡群1

No.	遺構番号	棺の構造	状態	備考
1	0-11	複棺	立位	
2	0-12	単棺	不明	
3	0-20	単棺	立位	
4	0-28	複棺	不明	
5	1-03(1)	複棺	不明	
6	1-03(2)	単棺	不明	
7	1-05	単棺	不明	
8	1-24	単棺	斜位	
9	1-27	不明	横位	
10	1-28	複棺	斜位	壺棺下に土器を敷いてある
11	1-33	複棺	斜位	
12	1-34	複棺	斜位	
13	1-35	複棺	逆斜位	
14	1-36	複棺	斜位	
15	1-37	単棺	横位	
16	1-38	複棺	横位	
17	1-40	複棺	斜位	
18	1-41	不明	斜位	
19	1-42	単棺	横位	
20	1-52	複棺	横位	
21	1-54	複棺	斜位	壺棺下に土器片を敷いている
22	2-94	不明	不明	
23	2-102	不明	立位	
24	2-103	不明	不明	



第5図 空沢遺跡3号壺棺墓図・写真

墓に葬る例は、弥生時代中期の再葬の伝統を引いている可能性も指摘できる。また新保遺跡周溝墓では成年の墓に壺棺墓を埋地している。主体部にある壺棺には頸部を打ち欠いているが、接合した壺の直径が20cmで成年を入れるには無理がある。これも再葬の儀礼の伝統が残っていると考えられる。高崎競馬場では弥生時代中期の礫床墓が確認され、中期に出現した礫床墓は、後期に継続することが分かる。中村遺跡円形周溝墓からはパレス壺が出土し、長谷津遺跡の土師器が出土した1号方形周溝墓と合わせ古墳時代前期まで継続している。礫床墓については科野の松原遺跡、柳沢遺跡、木棺墓は根塚遺跡、北西の久保遺跡等で確認でき、土器の共通性と合わせ、墓制も極めて密接な交流を指摘することができる。

壺棺墓は中期後葉有馬条里遺跡に確認され、再葬墓の伝統を引くものと考えられる。周溝墓は高崎城三の丸遺跡で、弥生時代中期後葉に四隅切れ方形周溝墓が確認され、同じく中期からの伝統を引く形態と言える。弥生時代の墓制は中期から継続して3つの墓が継続・並行することが理解できる。従って群馬県域内ではこの3種の中から各地域や各集団で選択していることが見て取れるのである。

6. 墓制からみた群馬県域の関係

群馬県域に広がる広い範囲に認められる墓制の有り様は、なぜ生まれるのかを考えてみたい。群馬県域の中では弥生時代中期後葉には科野との共通点を指摘すれば、同じ栗林式土器が出土する、更に新保遺跡や新保田中村前遺跡では、埼玉の北島式系の破片も出土し、南東北系の土器片も出土する。

吾妻郡長野原町にある立馬Ⅰ遺跡から弥生時代中期後葉の甕棺墓が出土し、甕の時期は有馬条里遺跡と同じ栗林期の墓である。(第1図) 遺跡は吾妻川の端にあり、川つたいに西に行けば科野、東に行けば渋川市に至る。立馬遺跡の吾妻川を挟んだ対岸にある川原湯勝沼遺跡では氷式土器並行の甕棺墓が出土し、弥生時代前期まで遡ることができる。科野とは縄文晩期からのつながりがあることを想起させる。渋川市内には押手遺跡があり、弥生時代前・中・後期の遺物が出土している。吾妻川ルートで科野との関係も遡ることができる。

高崎市地域と渋川市地域は礫床墓を始め壺棺墓、周溝墓が検出され、同じ土器を持ち、同じ墓制を持つ文化圏と言ってもよい。空沢遺跡壺棺墓下に敷かれた石、小八木志志貝戸遺跡遺跡の壺棺墓下に敷かれた土器片、新保遺跡D2号周溝墓主体部の壺棺墓下に敷かれた石と土器片は皆同じ用途に使われたものである。同じ意図をもって敷かれていると筆者は考える。さらに猪や鹿の骨片を墓周辺に蒔くことが同じ葬送の儀式に行われていたことも分かる。

また弥生時代中期に井野川流域に進出した遺跡は後期になるとさらに増え、平野部は耕地化していくことが理解できる。同じく群馬県域の弥生時代遺跡群は古墳時代前期に継続して発展している。そして古墳時代を迎える段階では外来系土器が出土する事実がある。さらに土師器は樽式土器や無文化する樽式土器と共伴出土する。

有馬遺跡では礫床墓、周溝を持つ礫床墓内の壺棺墓が存在し、成年被葬者の63号土壙墓も確認されている。新保遺跡では周溝墓の主体部に土壙墓・壺棺墓が存在する。

有馬遺跡では周溝を持つ墓内の礫床墓の中に壺棺墓があり、場所を共有することから主体部の選択は遺跡により異なり、強い規制は無く、埋葬者が選択することができたと思う。小八木志志貝戸遺跡では墓域全体は壺棺墓のみであり、小八木志志貝戸遺跡と新保田中村前遺跡では周溝墓域付近に猪、鹿の骨が蒔かれている。一方小八木志志貝戸遺跡では壺棺墓だけである。さらに新保遺跡の7号周溝墓第1主体部に設けられた壺棺墓には子供ではなく成人の男性骨が確認されている。有馬遺跡では壺棺墓は、ほとんどが子供である。有馬条里遺跡の壺棺墓は中期栗林式土器であった。つまり墓を造り埋葬する時には葬り方は様々存在し、その中から自由に選択したと筆者は考えている。

有馬条里遺跡の甕棺墓は中期の再葬の葬方の伝統を持つものかどうかの証明は骨が検出されていないので判断できない。しかし、有馬遺跡では礫床墓の被葬者は5～6歳以上が主体で、壺棺墓の大半の被葬者は胎児～小児という傾向はある。しかし、礫床墓を細かく観察するとsk119年齢が4歳前後、sk135は4歳前後であるが、sk119は土器棺墓、sk135が礫床墓に埋葬されている。またsk428は小児骨で礫床墓に埋葬され、sk396・sk397は人骨の出土は無いが、礫床墓床上に壺棺墓が埋置されている。前段で指摘したが、有馬遺跡63号土壙墓と新保田中村前遺跡159号竪穴建物内から出土した成年の歯は男性である。この2基は特に例外であり、何か集団内での立場を示すものだろうか。新保遺跡7号周溝墓の主体部は2基で、土壙墓と壺棺墓である。第1壺棺墓の人骨は胎児が一体であるが第2主体部土壙墓に人骨は成人人骨である。新保田中村前遺跡では6号土壙墓で3体の骨が出土し、3・5号周溝墓主体部土壙墓中から焼骨が出土している。さらに5号周溝墓第1主体部土壙墓中からは2体、第2主体部土壙墓中からは3体が出土している。

小八木志志貝戸遺跡は骨の出土が無いが、検出された壺棺すべてが子供用という考えは有馬遺跡、新保遺跡、新保田中村前遺跡の傾向からしてそうではないことが分かった⁽⁵⁾。新保田中村前遺跡の人骨の分析を行った佐倉朔は、5号周溝墓第2主体部の2体は「・・・下左第1白

歯は2個体存在するので、これらの歯が2個体分以上に属することが分かる。1個はやや大きく、咬耗は2度に達している。恐らく壮年で、男性のものである可能性がある。他の1個は中等の大きさで、咬耗は弱い。これら2個の大白歯はこのように個体的な差を示しているが、また近遠心径に比して頬舌径が比較的大きいことや、咬合面の咬頭と溝の配列においてかなり強い類似性がある。この所見は両個体の近い血縁関係を推測させるものである。」と指摘している。(佐倉朔1993)新保田中村前遺跡の埋葬は複数人があり、新保田中村前遺跡は同じ周溝墓の主体部が複数あるのは新保遺跡と共通するが、主体部内の焼骨、同じ墓に複数人の人骨があるなどの違いを見せる。さらに新保田中村前遺跡では礫床墓が1基確認されたことが特筆されよう。複数体の同一埋葬は佐倉の指摘に従えば5号周溝墓第1主体部の2体は近親者である。この結果は同一周溝内の埋葬は有馬遺跡5号周溝墓では3体が中央にあり、その両脇に小形の礫床墓がある。ここまでの検討で、壺棺墓の被葬者が乳児幼児に限られるという事実はないことが解った。さらに新保遺跡周溝墓主体部の壺内から成人骨が出土したが、復元された壺の割れ口は径20cmしかなく、その口から成人の体は入るのは難しい。このことから弥生時代後期の周溝墓主体部で再葬の伝統を持つコミュニティ集落が存在した可能性が指摘できる。新保田中村前遺跡では一つの周溝内に複数の壺棺・土壙墓を埋葬する例や、一つの土壙墓内に複数人の骨を埋葬するなどがある。

新保田中村前遺跡の周溝墓内と小八木志志貝戸遺跡の猪や鹿の骨を散布例が分かった。茨城県小野天神前遺跡では再葬墓の壺の中に焼獣骨を入れた例がある。

有馬遺跡と新保遺跡・新保田中村前遺跡等の関係だけではなく、様々な葬送儀礼を選びだした多くのコミュニティ同士が様々な形で通婚を含み徐々に新たな大きいコミュニティとして出来上がっていったと考えられる。

有馬遺跡報告書で表した〇〇号墓は墓域が近接し、その中に壺棺墓もあるので、家族墓の一種と考えられる。有馬遺跡では礫床墓と壺棺墓が礫床、同じ周溝内に確認することができる。また有馬遺跡の成年が被葬された63号土壙墓と新保田中村前遺跡竪穴建物覆土出土の成年の人歯の存在は、自由な選択というより異例な出土と考えられる。『魏志倭人伝』には倭国は身分の差があることが記載されている。奴婢の存在が明記されている。有馬遺跡63号土壙出土人骨と新保田中村前遺跡159号竪穴建物の歯は奴婢や生口であろうか。群馬県域内全体は非常に交流が長く続いた社会で、戦闘は生じないが生まれたコミュニティから外れた場合の扱いとも想像できる。有馬遺跡内には8基の土壙が確認され、人骨が出土したのは63号土壙1基のみであるが、礫床墓や周溝を持

たない土壙に葬られる人が少数いたことと考えることができるかもしれない。さらに新保遺跡59号竪穴建物出土の人歯は墓ではなく竪穴建物内覆土で出土している。

筆者は弥生時代の群馬県域内では、かなり密接に集落同士の交流が存在していると考えている。そのため、土器の土師器化の過程や遠距離地の土で作られた土器の供給の速さから考えて、交流網は極めて完備されていたと考える⁽⁶⁾。井野川流域ではまさに周辺の遺跡群の強いコミュニティ間の交流の存在がその背景にあったと考えることができる。有馬遺跡出土の鉄剣や、弥生墓から、硝子小玉の出土から交流があったことが分かる、という程度ではなく鉄剣の流通や通婚圏はかなり広い範囲を覆っていたことと筆者は考えている。

これは同じものが異なったコミュニティの墓にあるという事だけではなく、各々のコミュニティの出自を表していると考えたい。

古墳時代に入ると外来土器が出土し、科野との関係も重要である。複数他地域の土器や土師器平底甕が群馬県域の土で作られ、樽式土器の文様が消えていくのはそう言った地域同士の紐帯が深くなってきたからと筆者は考える。その中であって「市」が大きな役割を果たしていたのである。

7. 遺物からの検討

有馬遺跡の礫床墓から1本ずつ8本の鉄剣が出土した。5号周溝墓からはsk84・85礫床墓から並んで鉄剣が検出された。両礫床墓から多量の硝子小玉が出土している。鉄剣と硝子小玉は共存して出土することが分かる。筆者は発掘時、鉄剣が男性で硝子小玉が女性の副葬品と単純に考えたが、発掘が進むにつれ、それが違う事が分かった。sk84・85がまさに鉄剣と硝子小玉が大量に出土する墓である。sk84からは翡翠製の勾玉も出土した。両礫床墓の被葬者は成人であった。基本的に鉄剣が出土する礫床墓sk84・85とsk115・134・440で、成年4基、熟年1基の5基である。鉄剣が出土したsk41・111・140は残念ながら人骨は出土しなかった。鉄剣は空沢遺跡3号墓、同じく渋川市内にある田尻遺跡Y-1号竪穴建物内で出土するなど渋川周辺の出土例が知られる。他には渋川市の北に接する沼田市にある石墨遺跡円形周溝墓主体部土壙墓から出土している。

有馬遺跡出土鉄剣を分析した清水欣吾は金属分析の結果から、鉄鉱石ではなく、砂鉄が原料と推定した。「当時、日本ではこのような進んだ精錬があったとは考えられないので、大陸から舶載されたものと推察する。」清水はさらに鉄内容物から島根県内の古墳出土鉄剣・刀剣等の平均組成とおおむね一致するとし、「かなり高い還元度の高い精錬によってつくられた鉄素材を用いて製作されたものと推定され、恐らく、大陸から舶載された鉄素

材を用いたか、鉄剣として製品が舶載されたものであろう。」とした(清水欣吾1990)。近年では村上恭通が日本での弥生時代中期の鍛冶工房を西日本中心としたものとされている。関東地方に鍛冶工房ができるのは古墳時代初頭としている。鉄の依存度は半島南部が高いとしている。有馬遺跡には日本海側のルートを抜け土器と共に移動してきたと考える(村上恭通2020)。

筆者は鉄が来た道は北九州から山口県響灘綾羅木遺跡・鳥取県妻木晩田遺跡・青谷上寺地遺跡、石川県八日市地方遺跡、日本海ルートを抜け新潟裏山遺跡で南下し、長野を抜け群馬にきたものとする⁽⁷⁾。筆者は近江の伊勢遺跡、下之郷遺跡、特に舟運を想定された下長遺跡等の存在は琵琶湖から唯一流れ出る瀬田川から宇治川、淀川を通じて日本海と奈良、瀬戸内を繋ぐための存在として大きかったと考えている。群馬県域でも筆者は弥生時代中期～後期にかけて、群馬県域と科野との密なる交流があったことと理解している。それは土器の面からみると弥生時代中期後葉は同じ栗林式土器を持ち後期になると群馬では樽式土器、科野では箱清水式土器という共通性の強い土器を持つことである。また土師器化する段階では東海系、北陸系、畿内系、の土器を共有している。さらに藤根久・今村美智子が指摘した、群馬県の土で焼いたS字状口縁台付甕や土師器平底甕の存在である。彼らに従えば新保地域の「市」が極めて潤滑に群馬県域産の土で焼いたS字状口縁台付甕が広い範囲にS字状口縁台付甕・土師器を供給していたことが理解できる。また群馬の土でできたS字状口縁台付甕が古墳時代初頭期に素早く北毛や東毛地域まで広まっていた事実がある^(前掲6)。

伊勢崎市に波志江中宿遺跡がある。波志江中宿遺跡は古墳時代初頭の粘土採掘坑が確認された。波志江中宿遺跡から約1、2km南西に波志江中野面遺跡がある。藤根・今村は波志江中野面遺跡A区12号住居跡から出土した3個体のS字状口縁台付甕の胎土を分析し、1個体が波志江中宿の材料、他の2個体が藤岡・富岡地域の土としている。A区17号住居跡では5個体のS字状口縁台付甕を分析し、藤岡・富岡地域が3個体、2個体は波志江中宿の胎土としている。さらにA区7号方形周溝墓出土の北陸系千種甕、南関東系単口縁台付甕の胎土を分析し、両個体が在地の胎土であるとした。7号方形周溝墓からは他に在地の土で焼かれたS字状口縁台付甕が出土した。藤根・今村は7号方形周溝墓出土の北陸系千種甕・南関東系単口縁台付甕が群馬在地の胎土とした。さらに同7号方形周溝墓の共伴遺物の中に、無文化した樽式土器壺2個体が出土している。無文の樽式土器2個体は、ともに外面は頸部・体部底部に至るまで磨き、口縁内面は横の磨きが施され、弥生土器の技法を用いている。南関東系単口縁台付甕と北陸系千種甕は、内外面ともに刷毛工具で仕上げられている。波志江中野面遺跡竪穴建

物では藤岡・富岡の土で焼かれたS字状口縁台付甕と波志江中宿の土で焼かれたS字状口縁台付甕が伊勢崎の集落の中で共伴出土している。A区7号方形周溝墓では単口縁台付甕・北陸系千種甕が無文化した樽式土器と共伴し、胎土分析をしていないがS字状口縁台付甕も共伴している。藤岡・富岡の土で焼かれた土器が伊勢崎にあり、樽式土器と共伴することの意味は「市」の供給網の広さと外来土器の取り込みの速さを示していることの証明である。筆者はすべての土器が新保地域経由でもないと考えている。各地域に中継地点の存在もあると考えている。

しかし、鉄製品と鉄剣が作られていた遺跡は新保遺跡・新保田中村前遺跡であり、現在のところ、「市」と考えられる遺跡である。前橋市横手町に横手早稲田遺跡がある。この遺跡から出土したS字状口縁台付甕は胎土に片岩が目視確認され、これは藤岡・富岡の土の特徴である。横手早稲田遺跡は新保地域から南東約4～5kmにある。波志江町と新保町は約15km直接歩いた可能性があるが、筆者は中継地点の存在をも想定している点である。この可能性を筆者は以前より検討してきた⁽⁸⁾。弥生時代から古墳時代にかけて、筆者は群馬県域内ではコミュニティ同士つながりは強かったと考えている。そして弥生時代から群馬県域は北九州や山陰地方のような戦争は無く、コミュニティ間の交流も通婚圏の存在を含め、極めて密接な交流を維持していた社会であった、と筆者は考えている。

それを物語るのは「市」の供給の広さと速さである。「市」はそこの中にあって需要と供給を迅速にすることに役立っていたと考える。このような社会の構造は群馬県には大きな社会的な対立がなく、地域内で社会が醸成された結果ではないかと理解している。彼らは自分たちの地域で弥生時代前期より(もっと以前から)交流を維持していた社会であったと筆者は考えている。大きな変換は弥生時代中期後葉の農耕社会への踏み出しである。弥生社会は中期後葉に一気に平野部へ移動し、用水路を集団で造り始めた。それは小コミュニティが大きな社会へと集結変換した時である。

群馬県域内の遺跡ではコミュニティ同士のつながりは、武器の供給や木弓の流通と共に、葬送に大きな統制が無い。筆者はコミュニティ間の強いつながりは、お互いのコミュニティを認め合っているように思える。そして葬法の細かい異なりは背景にあるコミュニティ・集団の違いであると考ええる。有馬遺跡で80基を超す礫床墓が高崎市で1遺跡に1基～数基ある。八幡遺跡では土壙墓7基のうち1基が礫床墓、さらに新保田中村前遺跡では、礫床墓が1基、さらに同一墓壙に複数の人が葬られる。佐倉は新保田中村前遺跡5号周溝墓第1主体部の2体が歯の並びや顎の構造から近親者と考えられるという(前掲佐倉1993)。

さらに新保田中村前遺跡では焼骨の習慣を持っている。小八木志貝戸遺跡と新保田中村前遺跡では鹿と猪の骨を碎き墓域に蒔いている。有馬遺跡ではそういう習慣が見えなかった。このような小さな異なりを統制せずにそれぞれの習慣を維持している。

筆者は各々のコミュニティの出自の違いではないかとみる。そのため特に異なった習慣も問題にしなかったと理解している。

弥生時代後期から古墳時代にかけて群馬県域には土器に地方色はかなりあるが古墳時代初頭期には藤岡、高崎、伊勢崎の土で焼かれたS字状口縁台付甕や土器が相互に移動する流通網があったと理解する。北毛山麓地では各々土地に適した農耕社会を構成している。北毛の沼田市、中之条町等に拠点的な社会が生まれている。中之条町駅南遺跡では鉄剣が出土し、科野との吾妻川を媒介とした交流のルートの一環であった可能性が強い。南東平野部東毛地域にも新たな集落が展開したことが古墳時代前期の集落立地から理解できる。一方井野川流域は弥生時代中期後葉から古墳時代前期には遺跡群が大きくなり、増加していく。相馬扇状地形内は南に向かいさらに耕地が広がる。

そのような背景の中、有馬遺跡の礫床墓・壺棺墓を中心とする墓制、新保田中村前遺跡、日高遺跡、八幡遺跡、少林山台遺跡、長谷津遺跡に出土する礫床墓の点在は県内地域では長い間の交流が続いたコミュニティ同士が一緒になり農地を広げ、労力を併せ大きな集団になったと筆者は考えている。新保遺跡と新保田中村前遺跡は同じ遺跡と考えられる。しかし、壺棺墓は共有するが、新保田中村前遺跡では焼骨、複数埋葬を行っている等の違いが現れる。しかし、戦闘・戦争は起きていない。

お互いの広い農地と交流が維持・継続していたと理解できる。当時の群馬県域の壺棺墓の定着、新保遺跡周溝墓主体部に使われる壺棺墓は県内域を網羅している。弥生時代中期後葉の各々コミュニティの違いを継承したと考える。

この社会を維持するために「市」の機能が大きかったのである。

8. 「市」の果たす役割

古墳時代初頭期に県内広い範囲にまで外来系土師器やS字状口縁台付甕が樽式土器と並行して供給されている。これが意味するものは「市」があり供給が群馬県域内広い範囲に流通していたことを示している^(前掲註6)。

筆者は「市」は新保地域では中期後葉から始まり、古墳時代前期初頭まで群馬県域全体に機能していたと考えている。新しい土器が便利と思えば在地で土をこね、土師器を焼き、供給が始まったと筆者は考える。

ここでは「市」の果たす機能を検討したい。筆者は新保

地域を「市」と考えた。理由は新保遺跡・新保田中村前遺跡の墓には鉄剣は無く鉄片だけである。一方で有馬遺跡では8本出土した。しかし有馬遺跡では成品しか出土していない。新保遺跡・新保田中村前遺跡では鉄剣の柄の完成品、未成品、更に鹿角を大量に備蓄していたことが確認されている。鉄剣の茎に穿たれた目釘孔から鹿角製柄と鉄剣はセットで製造されていたことが分かる。目釘孔は当然鉄剣が無いと併せられないからだ。有馬遺跡の鉄剣は新保地域から来ていると筆者は考えている。有馬遺跡の他に渋川市では空沢遺跡礫床墓、渋川市と北に接する沼田市石墨遺跡でも鉄剣が周溝墓の主体部から各々1本ずつ出土し、渋川市、八崎の寄居・田尻遺跡では竪穴建物内で鉄剣が出土している。

新保地域では農具も大量に出土し、未成品も確認されている。日高遺跡の農具と新保遺跡・新保田中村前遺跡の農具は同じく東海系・近畿系・北陸系のものであり、東国では一般的な傾向である。

筆者は新保遺跡と新保田中村前遺跡は同じ集落と考えている。ここから「モノ」が群馬県域全体に供給されていたと考えられる。

土器を見ると古墳時代初頭期には畿内系・北陸系・東海系の土器が出土する。土器の面からも外来系の土器や樽式土器の無文化が起きる段階には沼田市、北に接する川場村の北毛、中之条町の北西地域、太田市、伊勢崎市の東毛・高崎や安中市の西毛、今の群馬県域全体から樽式土器の無文化と土師器の共伴出土が確認され、古墳時代初頭の段階で土師器の取り込みと、樽式土器の土師器化が開始されたことが確認できる^(前掲註6)。赤城山南麓や榛名山東南麓地域等で、古墳時代初期の土師器が広い範囲で出土する。東海系S字状口縁台付甕は藤根・今村の分析に従えば、群馬県域内、榛名山系、伊勢崎市、藤岡・富岡市近辺の土で焼かれている。(勿論胎土分析した結果であり、県内すべての土器の分析は行われていない。)

このように広い範囲に大きく広がるのは「市」の広く早い供給網の完備があつてのことである。土師器は古墳時代文化と共に、一気に群馬県域に広がっているのである。筆者は当時の群馬県域には、北九州や山陰地方にみられる戦闘や戦争が無かった地域と考えている。理由は戦闘による受傷人骨の出土が、全く無いことである。農耕社会内では他国の領土侵犯をすれば殺されるか、奴隷にされる社会であり、コミュニティから離れることは死を意味する。有馬遺跡63号土壌に葬られた成人骨は有馬遺跡では土壌墓、新保田中村前遺跡159号竪穴建物内の人歯は覆土中に埋まっていた。コミュニティ内の墓制では特殊なものである。勿論159号竪穴建物の覆土出土の人歯は混入の可能性があるが、2体はコミュニティ内での位置を示唆する。各々自分の領域を守り徐々に広がっていたことが看取される。それほど交流が強く、「市」

が円滑に機能し、「市」は弥生時代後期には今の群馬県域内の大方の範囲を網羅していたはずである。それが威信材としての鉄剣を始め貴重な「モノ」が移動していたことを示している。

筆者はこのような強い交流を維持できたのは通婚圏が群馬県域に広がり、円滑に機能したと理解している。通婚圏は現代の群馬県域を広く覆っていることが理解できる。その表れが墓への埋葬形態が多様に存在することが認められるからである。埋葬形態の多様性こそが自らのあるいは残された人々のコミュニティの多様性につながるのではないかと考えている。それは有馬遺跡と新保遺跡・新保田中村前遺跡の関係だけではなく、群馬県域全体のなかに通用する見方であったと考えることができる。だから井野川流域の土壙墓群の中に礫床墓が数基あるいは1基だけ出土すること、周溝墓の主体部に壺棺墓、土壙墓等の異なりがあるのは、婚姻者が他のコミュニティから来たことにその要因があったのではないかと考える。勿論鉄剣のような貴重品が広い範囲の中に出土すること、と同時に死者の生まれたコミュニティの葬法を残された人間が慮ったと理解する。そこには弥生時代前期から古墳時代まで続く葬法の伝統に裏打ちされている。

本小文を草するにあたり、友人であり、同僚である大木紳一郎君に多大なるご助言、ご指導をいただいた。記して感謝する次第である。

註

- (1)以前の報告書では住居跡という呼称であったが、近年の呼称である堅穴建物に統一した。以後同じである。
- (2)有馬遺跡・新保遺跡の人骨分析は当時の聖マリアンナ医科大学の森本岩太郎、吉田俊爾、新保田中村前遺跡人骨は札幌学院大学の佐倉朔、に依頼し、中村遺跡は早稲田大学の金子浩昌の報告書の所見である。各氏の年齢区分が同じ年齢でも呼称が異なるため、近年の研究区分に改める。ここでは九州大学の米元史織が最近行なった分類を使う。乳児0～1歳、幼児1～6歳、小児6～12歳、若年12～20歳(森本・吉田、青年)、成年20～40歳(森本・吉田・佐倉・金子、壮年)、熟年40～60歳、老年60歳以上である。ただし、各遺跡での用語の使用は原文のままにして記載する。
- (3)友廣哲也「古墳社会の成立」『日本考古学』日本考古学協会 71～91頁
友廣哲也『土器変容にみる弥生・古墳移行期の実相』同成社
筆者はここで新保遺跡・新保田中村前遺跡・日高遺跡までを含めた範囲での「市」の存在を指摘した。主体は新保遺跡・新保田中村前遺跡での農耕具、鉄剣、鹿角製の柄、木弓に使うイヌがヤ等の豊富な「モノ」が出土したことによる。さらに『魏志倭人伝』に記載されたト骨に使われた灼骨の出土等々その背景にある「モノ」の管理体制を感じた。
- (4)角座骨は落角と違い角の頭の中にある部分である。つまり鹿狩りをして角を取ったと考えられる部位である。
- (5)小八木志志貝戸遺跡報告書「5 総括一小八木志志貝戸周辺の弥生

時代」で坂井隆は「土器棺墓群は周辺で全く他に墓域が発見されていないことを見れば、幼児胎児埋葬に限定すべきではないだろう」と指摘している。

- (6)友廣哲也2020「邪馬台国の時代と東国―在地土器の変遷と人の移動の視点から―」『研究紀要』38号
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団51～66頁
- (7)友廣哲也2015『土器変容にみる弥生・古墳移行期の実相』同成社
- (8)友廣哲也2015『土器変容にみる弥生・古墳移行期の実相』筆者はこれの中で井野川流域も含め、群馬県域の集落の中で以上に甕・壺等の数量が多い堅穴建物を確認している。例えば高崎市下佐野遺跡7区45号堅穴建物からはS字状口縁台付甕25個体、土師器平底甕10個体、壺17個体、高坏8個体、器台6個体、小形埴2個体合計すると70個体を確認している。各集落内にはこのような堅穴建物を確認することができる。筆者は各コミュニティ内でのストックと想定している。

引用・参考文献

- 相京建史・小島敦子1992・1993『新保田中村前遺跡Ⅱ・Ⅲ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 飯田陽一・岩崎泰一2012『長谷津遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 飯森康広2006『立馬Ⅰ遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大江正行・平野進一1982『日高遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 飯森康広2006『立馬Ⅰ遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大木紳一郎1997「弥生時代の遺構と遺物」『南蛇井増光寺遺跡Ⅴ』680～723頁 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大木紳一郎2001「元総社西川遺跡出土の古墳時代前期の土器について」『元総社西川遺跡』105～110頁 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大塚昌彦1985『空沢遺跡 第5次』群馬県渋川市教育委員会
- 大塚昌彦1980『空沢遺跡第2次・諏訪ノ木遺跡』概報 群馬県渋川市教育委員会
- 金子浩昌1986「1.中村遺跡出土人骨および動物骨」『中村遺跡』521～535頁 渋川市教育委員会
- 熊谷 健2001『波志江中宿遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 神戸聖語他1989『八幡遺跡』高崎市教育委員会
- 小泉範明2004『史跡 日高遺跡』(第7～9次調査)概報 高崎市教育委員会
- 坂井 隆1999『小八木志志貝戸遺跡Ⅰ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 坂口 一1989『有馬条里遺跡Ⅰ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 佐倉 朔1993「(4) 新保田中村前遺跡出土人骨」『新保田中村前遺跡Ⅲ』159～162頁 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤明人1990『有馬遺跡Ⅱ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤明人1988『新保遺跡Ⅱ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 設楽博己1993「壺棺墓再葬墓の基礎研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集3～48頁
- 設楽博己2008『弥生再葬墓と社会』塙書房
- 清水欣吾1990「(4)有馬遺跡出土鉄剣の分析」『有馬遺跡Ⅱ』441～445頁
- 下城 正1994『新保田中村前遺跡Ⅳ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋龍三郎2016「縄文後・晩期社会におけるトーテムズムの可能性について」古代第138号 75～142頁 早稲田大学考古学会
- 角田芳昭2001『波志江中野面遺跡(1)』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 徳江秀夫・飯塚 誠1993『少林山台遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 友廣哲也1983『研究紀要』創刊号 20～28頁 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 友廣哲也2020「邪馬台国の時代と東国」『研究紀要』38 51～66頁
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

- 友廣哲也2015『土器変容にみる弥生・古墳移行期の実相』同成社
- 長谷川福治1999『八崎の寄居・田尻遺跡』北橘村教育委員会
- 藤根 久・今村美智子2001a「土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴」『波志江中宿遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 村上恭通2020「令和2年度 全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会」資料
- 森本岩太郎・吉田俊爾1988「(4) 新保遺跡出土人骨について」『新保遺跡Ⅱ』463～466頁 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 森本岩太郎・吉田俊爾1990 7 鑑定分析 「(1)有馬遺跡出土の弥生時代後期の人骨について」『有馬遺跡Ⅱ』425～431頁 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 山田正久1982「第4章 木工技術の変化と特徴的な着柄鋤・鍬について」『日高遺跡』485～492頁 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 山田昌久1986「13 新保遺跡出土木製品・加工品」『新保遺跡Ⅰ』151～188頁 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 米元史織2017『人類学から明かされる金井遺跡群に生きた人々』
- 平成28年度 公開講座資料 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 横沢克明他1986『中村遺跡』渋川市教育委員会
- 図録 『北陸の弥生世界わざとところ』2019 大阪府立弥生文化博物館
- 図録 『弥生人の祈り』—東国の再葬墓—2013 栃木県立博物館